

生活科・総合的な学習の時間研究部

1 研究主題

学びをつなぐ生活科・総合的な学習の時間
～豊かな関わりを通した『生きて働く知識』の具体化を目指して～

2 研究主題について

(1) 研究主題・副主題設定の理由

本研究会では平成28年度より研究主題を「学びをつなぐ生活科・総合的な学習の時間」としてきた。その意図は、生活科・総合的な学習の時間（以下、総合）の研究会が統合されたことを受け、生活科・総合の学びのつながりをもたせたいと考えたところにある。また、生活科・総合が共通して目指す子どもの姿は、学びを通して

- 本物と向き合い、本気で追究する姿
- 学び合い、高め合う姿
- 「生きて働く知識」を自分のものにする（語る・使う・行動する）姿

であり、総じて、子どもたちが新たなものの見方や考え方を獲得し、生活を豊かにしたり生き方を考えたりしていくところにあると考えた。

また、それらを実現するための手立てとして3つの「つなぐ」が有効であると考え、研究を進めてきた。3つの「つなぐ」とは「実社会・実生活とつなぐ」、「一人ひとりの学びをつなぐ」、「授業と授業、単元と単元をつなぐ」である。

副主題については令和元年度に「豊かに関わり続ける子どもの姿を目指して」とし、「豊かに関わり続ける子どもの姿」をスポット的に語る時間を多く設定してきた。そうすることで、充実した体験活動の重要性、個の見取りの重要性、「豊かに関わる子ども」に対する捉え方の広がり、子どもの願いに沿った単元構想の実現などが見えてきた。

一方、その活動や体験が、本当に一連の探究的な学びの中に位置付けていたのかが曖昧であった。また、教師が、本当に単元構想の段階から、子どもの成長を願って「結果の子ども姿」を想定していたのかが見えづらかった。以上の振り返りから、これまで同様に対象と豊かに関わる活動の過程で、教師自身が、子どもの成長を願い、どんな気づき、「生きて働く知識」を学ばせていきたいのか単元構想の段階で具体的に分析する必要がある。また、1時間の授業の中で子どもが対話を通して、それらの気づき、「生きて働く知識」を獲得できるよう、意図的・計画的な手立てを明確にしていく必要がある。よって、昨年度までの研究を引き継ぎ、今年度の研究副主題を「豊かな関わりを通した『生きて働く知識』の具体化を通して」とした。

3 研究方法 ※下線：今年度の重点課題

①単元構想

- ・材の吟味（何で学ぶか・何と学ぶか・何から学ぶか）
- ・単元で育てたい資質・能力の分析・明確化（何を学ぶか・身に付けるか）
- ・課題の設定及び子どもの思いや願い・思考に沿った単元の展開（どのように学ぶか）

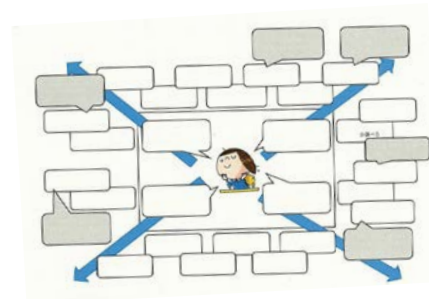
【実現に向けた取組】 ウェビングの活用

②授業づくり

- ・前時までの子どもの見取りに基づく期待する姿の設定
- ・期待する姿に向けた教師の手立ての明確化

【実現に向けた取組】 逆算ウェビング（パノラマップ）※今年度の新しい取組

- カリマネ要領・学校の全体計画における「知識及び技能」を確認する。
- 上記に基づく子どもの具体の姿（＝「生きて働く知識」）を発言レベルで想定する。（白枠の部分）
- 具体の姿にせまるおおまかな子どもの活動や教師の手立てを吟味する。（黒枠の部分）



4 年間活動報告

7月 1日（水）	研究主題理解研修 単元づくり研修
9月 9日（水）	初のオンラインでの研究会 研究副主題理解研修 ミニ相談会
10月 7日（水）	連携部によるミニ研修 実践提案①（単元構想を中心に）
11月 4日（水）	実践提案②（授業づくりを中心に）
12月 5日（水）	國學院大學 田村 学先生によるご講演と鼎談
1月13日（水）	生活・中学年・高学年の3部会に分かれて研修 パノラマップを活用した（9）成長単元の単元づくりと単元の修正
2月10日（水）	第二次教育研究大会 生活科・総合の実践から気づきが深まったと感じる子どもの姿とそのための手立てについて考える
3月 3日（水）	コロナ禍における単元展開の工夫 今年度の各自の実践の振り返り

5 研究の成果と課題

今年度までの四年間、研究主題「学びをつなぐ生活科・総合的な学習の時間」の実現に向けて「つなぐ」をキーワードとし、研究を進めてきた。また、今年度は「生きて働く知識」を子どもの発言レベルで想定するために、逆算ウェビング（パノラマップ）を活用して、単元づくりや単元の修正を行ってきた。

今年度の主な成果と課題は以下のとおりである。

〈成果〉

- コロナ禍の中、人とのつながりをどうもたせたらよいかどの学校でも課題だったが、今年度ならではの実践を聞くことで、材のもつ価値を見直したり、人とのつながり方の新たな方法を考えたりすることができた。
- パノラマップを活用して、「生きて働く知識」を子どもの発言レベルにおとして想定することで、より具体の姿にせまるための子どもの活動や教師の手立てについて考えることができた。
- zoomでの研修会はパワポ資料がとても見やすく、自分事として聞くことができ効果的だった。
- zoomで実践提案のあと、グループで話し合う時間を設定してきた。実践提案を聞くだけでなく、互いに悩みや各学校の取組を聞くことで、自分の実践の手立てにつながるアイデアをたくさん得ることができた。
- 組織の見直しを行い、組織図を変更した。生活科部会、総合中学年部会、総合高学年部会、情報部、連携部を5部会として部長をおき、研修内容を考えたり運営したりしてきた。そして、副部長が実践提案などの取りまとめを行い、いろいろな人が自分事として、運営できる組織をつくった。人材育成につながる効果もあった。

〈課題〉

- 9月からコロナの影響で研究会をzoomで開催してきたが、例年に比べ、参加者が減ってきているのが現状である。会費を昨年度より値下げしたが、オンライン開催会費が続き集金にも苦慮した。参加者を増やす方法や会費の使い道、集金方法等を再考する必要がある。また、zoomでは子どもの活動写真を使うことができないので、今後提案方法も考えていかなければいけない。